

日本現代文學全集

69

プロレタリア文學集

編集

伊藤 整
龜井 勝一郎
中村 光夫
平野 謙吉
山本 健吉



初版 第1刷

昭和44年1月19日

増補改訂版 第1刷

昭和55年5月26日

著者 前田 河廣一郎
林 房雄
里 村 欣三
藤 森 成吉
立 野 信之
ほか

發行者 野間 省一

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽 2-12-21

郵便番號 112

電話東京03 (945) 1111(大代表)

振替東京 8-3930

裝幀 蟹江 征治

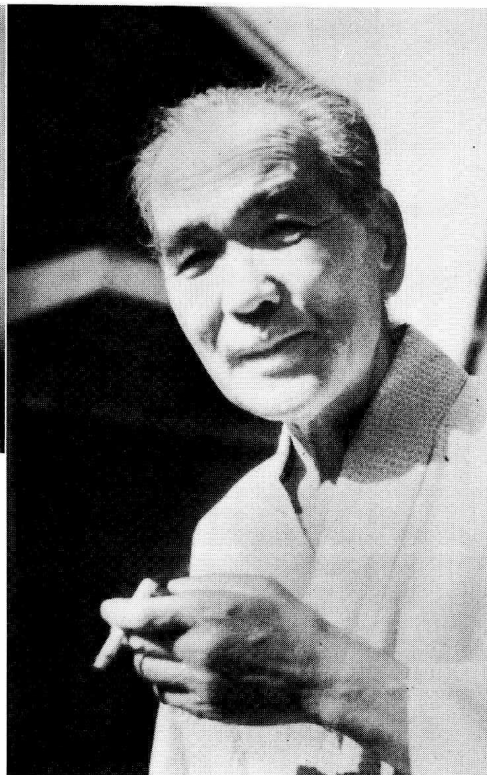
印刷 豐國印刷株式會社
製本 株式會社國寶社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

Printed in Japan

0395-106695-2253 (1)

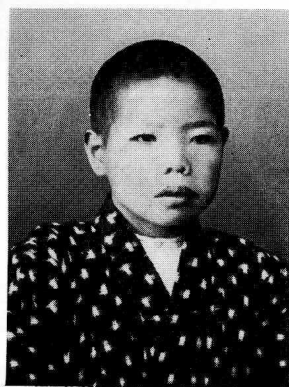
(文1)



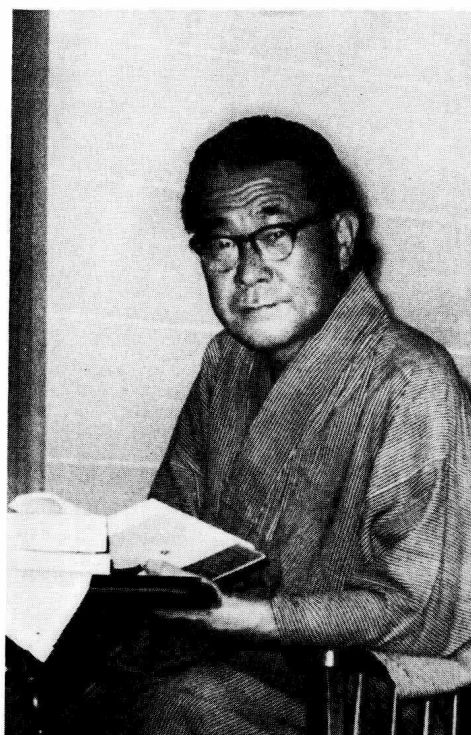
→ 昭和三十二年 前田河廣一郎

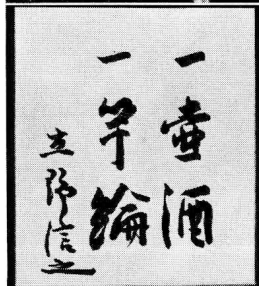
↑ 昭和十七年十一月 前列左から
妻 咲子 廣一郎 長男 力
後列右から二人目 長女 一枝
次女 友枝

→ 明治四十二年 里村欣三

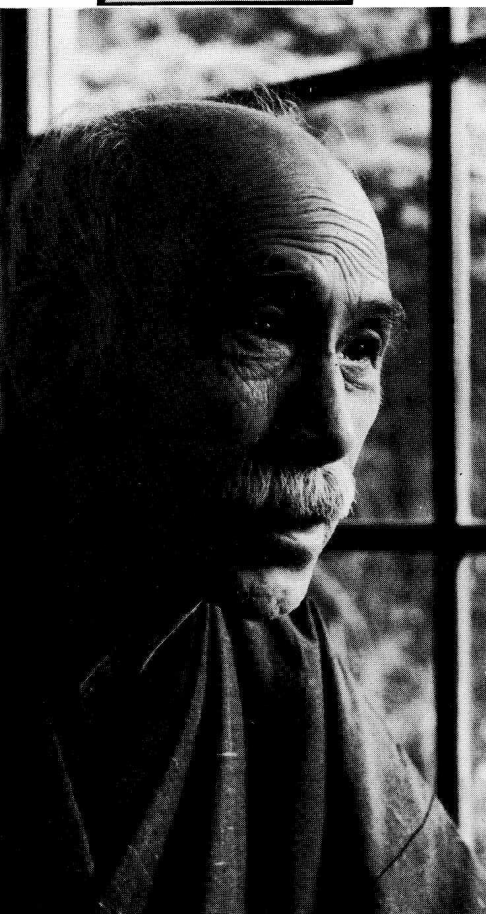


→ 昭和四十三年十一月 林房雄



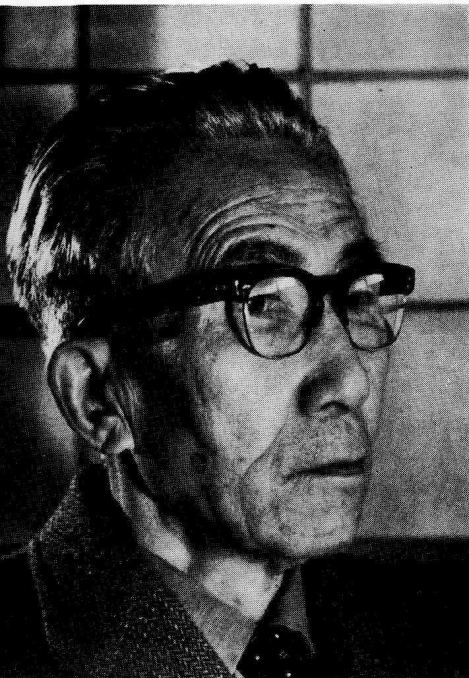


→昭和四十三年十一月二十六日 立野信之
↑昭和九年頃 信之
←筆蹟



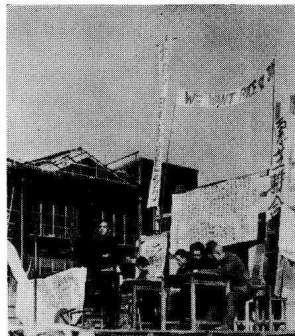
→大正十三年 労働體驗時代 右 成吉 左 妻 のぶ子
↓昭和十七年八月 長野縣蓼科高原にて 右から二人目 中村甌右衛門 成吉 河原崎長十郎
←昭和四十三年十二月十日 藤森成吉





←昭和四十二年五月 間宮茂輔

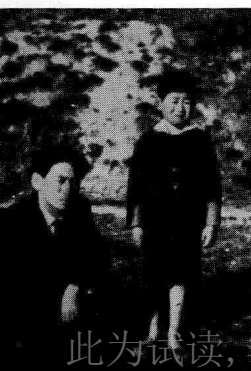
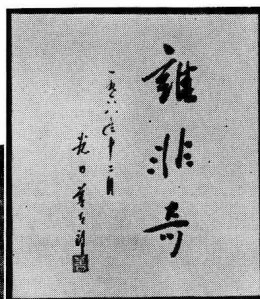
→昭和二十一年二月 川崎市東芝堀川町工場にて 左端 岩藤雪夫



↓昭和三十七年二月 右から 雪夫 長男 守雄



←昭和十六年一月 静岡縣久根礦山にて 中央 茂輔



←昭和十年四月 京にて 右から 長一雄

筆蹟

→昭和四十三年十一月二十八日 須井一



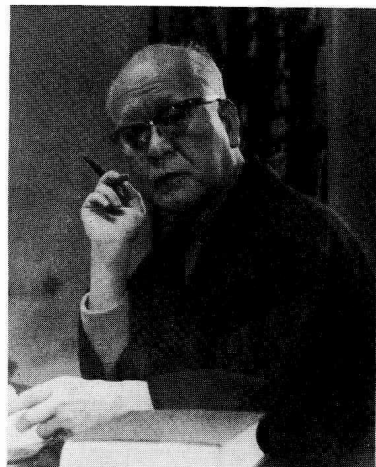
→昭和三十一年一月 窪川鶴次郎
←昭和十二年頃 右から 宇野浩二 鶴次郎



→昭和二十五年頃 右 鶴次郎
左 金田一京助



→昭和四十一年 貴司山治



↑昭和八年二月 小林多喜二の通夜にて
前列右から 原泉子
田邊耕一郎 上野壯夫
立野信之 山田清三郎 鹿地亘 千

→昭和十年十二月 四公にて「文学案内」の命令
前列右から 村山知義
舟橋聖一 森山啓平
林たい子 島木健作
後列右から 貴司山治
中野重治 石川達三
青野季吉 北川冬彦
藤森成吉 渡邊順三
遠地輝武





→昭和十三年五月 前列右から 劉寒吉
山省三郎 後列右から二人目 平林彪吾
←昭和四十二年五月 江口渙



→昭和四十年五月 中野秀人
←昭和三十六年六月 中國萬里の長城にて 前列 右から
松本正雄 李季 後列右から 江馬修 渙 壺井繁治

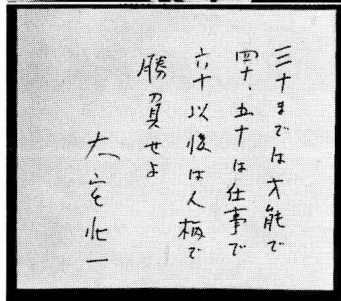
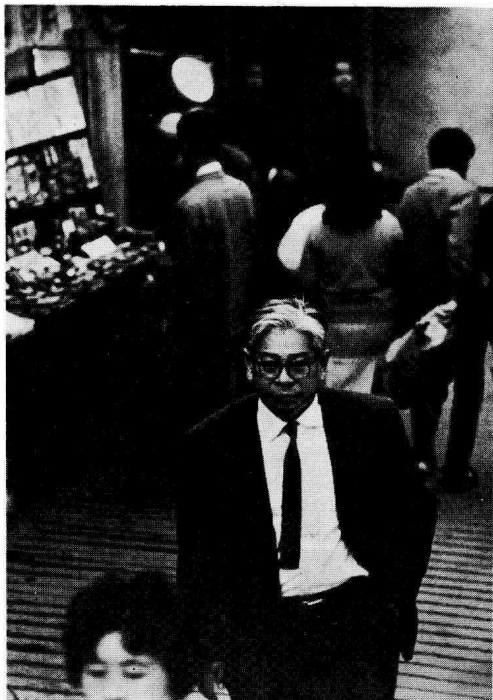


→昭和六年 平林初之輔
←大正十四年 前列右から 昇曙夢 吉
江喬松 初之輔





→昭和三十五年十月 大宅壯一



↑昭和十七年二月 宣傳班
としてジャワに向う輸送
船中 右端 壯一
←筆蹟



↑昭和三十五年 中國にて
ら二人目 ホーチャーミン
惟人

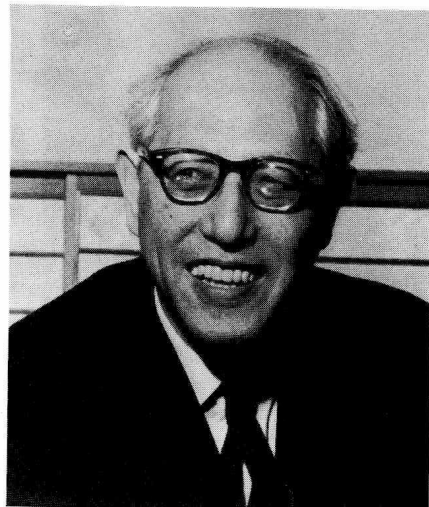
→昭和四年 惟人



→昭和四十三年十一月二十六日 藏原惟



→昭和三十三年頃 勝本清一郎
←昭和三十三年一月 山田清三郎



←昭和九年十月 新宿 白十字にて 前列坐る人右から 藤森成吉 宇野浩二 徳永直 一人おいて 白柳秀湖(右後 壺井繁治) 一人おいて 林房雄(右後 佐多稻子) 宇野千代(右後 宮本百合子) 阿部艶子 三人おいて 秋田雨雀(右後 平林たい子) 武田麟太郎(右後 川端康成) 横光利一 立つ人最前列右から三人目 小林秀雄



→昭和四十三年六月 宮本顯治
←プロレタリア文学雑誌





→昭和十八年 甘粕石介

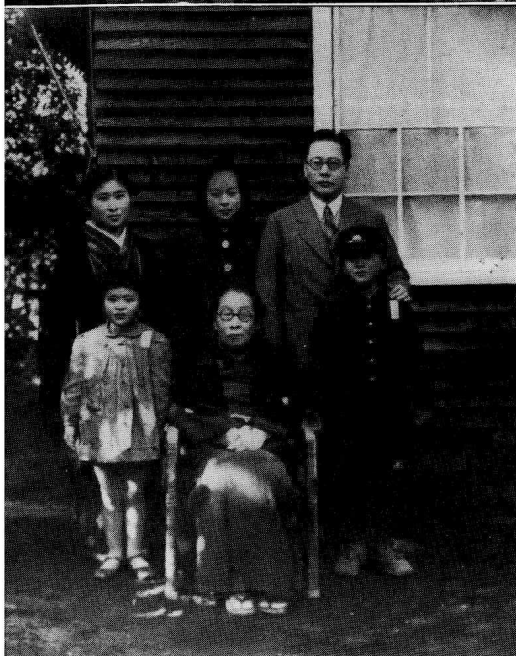


→昭和四十年頃 川口浩

←昭和九年「文學評論」の會 前列右から 川口浩 龜井勝一郎 江口渙 立野信之 宮本百合子 後列右から 渡邊順三 一人おいて 松田解子 窪川鶴次郎 森山啓 徳永直



←昭和十七年十一月 前列右から 長男 海母 久仁子 次女 月子 後列右から 戸坂潤 長女 嵐子 妻 イク



→昭和三十年 モスクワにて 後列右から 順一 徳永直

←昭和三十一年五月 岩上順一



プロレタリア文學集 目次

卷頭寫眞

前田河廣一郎

三等船客……………七

林 房雄

林 檣……………六

繭……………三

里村欣三

苦力頭の表情……………七

藤森成吉

散彈……………四

土堤の大會……………四

立野信之

友情……………五

山内謙吾

三つの棺……………七

山本勝治

十姉妹……………六

岩藤雪夫

ガトフ・フセグダア……………六

間宮茂輔

朽ちゆく望樓……………二三

木村良夫

嵐に抗して……………二四

須井 一

綿……………二五

窪川鶴次郎

風雲……………二七

貴司山治

青服……………二三

平林彪吾

鶏飼いのコムニニスト……………三六

江口 渙

人生の入り口……………三四

金 史 良

光の中に……………三六

中野 秀 人

第四階級の文學……………三六

宮嶋資夫

第四階級の文學……………三六

平林初之輔

唯物史觀と文學……………三六

文藝運動と勞働運動……………二九〇

政治的價值と藝術的價值……………二九四

大宅 壯一

文學的自己清算に就て……………二九八

マルクス主義の自殺か暗殺か……………三〇四

藏原 惟人

プロレタリア・レアリズムへの道……………三〇九

藝術運動當面の緊急問題……………三一五

ナップ藝術家の新しい任務……………三二〇

藝術理論におけるレーニン主義の

ための闘争……………三二四

勝本清一郎

藝術運動における前衛性と大衆性……………三二九

山田清三郎

プロレタリア藝術運動理論……………三三六

小堀 甚二

プロレタリア藝術運動理論……………三四九

宮本 顯治

敗北の文學……………三五五

甘粕 石介

創作方法と世界觀との相互浸透……………三六七

林 房雄

プロレタリア文學の再出發……………三七

川口 浩

否定的リアリズムについて……………三〇

戸坂潤

認識論としての文藝學……………三六

岩上順一

考える世代……………三九二

作品解説……………久保田正文 三六

プロレタリア文學入門……………紅野敏郎四〇

年譜……………
24
24

参考文献……………四二

プロレタリア文學集

前田河廣一郎

三等船客

一

「あれ、懽つたい。」
はねのけるように癡高な、鼻のひくい、中年期の女のみが發し得る聲が、總體にゆいゆいと傾いた船室の一隅からひびいた。女の姿は何かの蔭になつて見えなかつたが、男は前のめりに動いた姿だけ、汚らしい壁の上に、不自然な暴動の影を投げて、崩れるように暗い方へ消えてしまつた。

「畜生、ふざけてやアがる。」

かなりな距離ではあつたが、さつきからその暗隅を見すかしていた偏目の男は、巻煙草の端を上へのベッドから床へ投ると同時に、もうじつとして見ては居られぬと云う風な性急な言葉を吐いた。

そのわきに、ベッドに匍匐になつて講談本を讀んでいた男も、その時、むつくり頭をあげて、偏目の男の熟視している方を眺めた

が、すぐつまらなさそうに横を向いて、髻の中で嗤つた。

「ハワイへ着いたら尻尾を出すよ。」

偏目の男は、向き直つて對手に何か云いかけようとした刹那、

「わたし、もう立つの。つまらない。ちよつとそこを通してさ。」

と早口に云つて、暗隅に居た女が、煤けた送風機の後ろから上

氣した顔をあらわしたので、急いでまた元へ向き返つた。

「そんなに急いで立たいでもええじゃないか、かみさん——」

肺の強そうな、男の聲が、蔭の方から女を追いかけた。

「もう、男の人は、いや。」

脚元があぶないので、送風機の胴へ片手を置きながら、華奢な踵

の高い白靴を、船室のまん中の一段高くなつた壇の上へ載せた女

は、肥つた笑い顔を、今出て來た方へ向けた。その拍子に、船が一

揺れしたので女の手は送風機の胴を離れて、壇上の足が床の上の足

と重り合うたと思うと、彼女の兩手はすぐ横手のベッドの鐵柱をめぐ

がけて、身體もろともびつたりと吸いついた。

「おゝ危い。——書生さん、御勉強ですか？ 書生さん。」

抱いた鐵柱をそのまま揺つた彼女は、のびあがるようにして上の

ベッドを見あげたが、そこにいる青年は頭から毛布を被つて眠つて

いた。方々の男どもは、彼女の扁平つたい顔と派手な格子縞のスカ

ートとに向つて犯すようなみだらな視線を注いだ。女はきまり悪げ

に、いろいろな色合の毛布や蒲團で圍まれたベッドとベッドとの間

に、まぎれ込んでしまつた。

「ふられたね。」

うすつべらな笑いとともに、妙に細い聲が、暗隅の男へ話しかけ

たらしく、その邊のベッドから響いた。二三人のえへら笑いがそれ

に續いた。

「ありや一體何だい、君？」

「酌婦よ。」

「そうかな、それにしても堅氣らしい處もあるぜ。」